

佐賀平野のクリークの現状と課題 Current State and Problems of Creek in Saga Plain

加藤 治
Osamu Kato

1. まえがき

佐賀平野に網の目のように流れるクリークは総延長 2000 km と言われ、全国でも特有の風情を醸し出している。貯水量は 2100 万 m³ と貴重な水源であるが、総面積 3300ha と水田面積の約 10% におよぶクリークが営農面でも日常生活でも近代化を阻んできたため、クリークの整備が進められている。機能的に整備が進められているが、近年の住民の意識の変化に対応して、環境を配慮した整備を望む声が強くなる。今後望まれるクリークの姿がどのようなものであるかをまとめてみた。

2. クリークの生成過程と従来の機能

佐賀平野は有明海の湾奥部に発達した沖積平野である。この平野は有明海湾奥部に筑後川をはじめとする河川郡からの流入土砂の堆積によって、1年に10mの割合で干潟が発達し、その土地を干拓等により陸化することによって成長した。干潟面上には、「みおすじ（漣筋）」が縦横に形成されている。この漣筋こそ平野に広がるクリークの前身である。平野は沖へ沖へと伸びて水源地から次第に離れていくため、農地にとってクリークは用水源、用水路、排水路、貯水池、調整池など多くの機能を持つものとなった。特に、有明海の干満差を利用した「淡水（アオ）取水」によって河川水をクリークに貯留し、これを用水とする。また、有明海が満潮の時には、排水ゲートを開扉することができないので、排水を一時クリークに貯水し、干潮時に排水する。まさに先人の知恵である。

また、クリークの水は集落の生活用水、雑用水としても利用されていた。冬期にはこの生活用水分を残して、クリーク水位を下げ、乾田化して裏作に対応させていた。

農業の近代化を図るために、昭和50年から佐賀・福岡両県にまたがる約5万 ha に及ぶ大規模灌漑排水事業が発足した。圃場整備事業を基幹とし、曲がりくねっていたクリークを1000~1500 m間隔に深く、広く、直通に掘削して幹線用排水路とした。これに支線用排水路を連結し、水管理が容易に出来るようにした。

しかし、急速な都市化、混住化は急激な開発によって失われていく自然環境を少しでも残そうとする気運を醸成させた。

3. これからのクリークの保全と活用

いま、クリークに求められている機能として、



Fig.1 クリーク



Fig.2 レクリエーション機能の一例

農業基盤形成機能（農業用水、排水）
防災機能（地域排水、洪水流下及び調節、消化用水等）
環境保全機能（動植物の生息空間、水の有効利用等）
レクリエーション機能（魚釣り、環境学習の場等）
景観形成機能（目で見て楽しむ、親水性）

が考えられる。

従来の整備は、～の機能のなかでも特に及 Fig. 3 コミュニティ機能の一例
びの機能が重点的に実施されてきた。しかし、整備後長い年月の経過に伴う法面崩壊や農業者の減少に伴う維持管理の粗放化によりクリークの持つ、の機能低下が顕著となってきた。このため、地域からクリーク機能の維持保全のための新しい事業が求められている。自然環境に対する住民の関心が高まるなか、その護岸整備に当たり～の機能をも充分視野に入れた整備が求められている。たとえば水辺に降りられる階段を作る、魚釣りができる施設を作る（Fig. 2）、コミュニティの中心となる拠点造り（Fig. 3）など。

もう一つ重要なことは、管理の問題である。従来はクリークが農業用排水だけではなく、生活用水、雑用水として使用されていたため、定期的な泥上げが行われ、クリークの水深を確保するとともに、あげた泥は田畑の肥料として利用された。土手には柳類、エノキ、ムクノキ等が植えられ、護岸とともに休憩場所でもあった。また、クリークに生育するアシやモコは燃料、屋根の材料、籠等に利用され、コイやフナは貴重な蛋白源であった。このようなことから、住民が定期的に管理を積極的に行ってきた。



Fig. 4 クリーク公園の一例

近年の混住化、生活様式の変化はクリークに対する関心を薄れさせ、管理は行政が行うものとの思いが強くなっている。佐賀においては、ホテイアオイがクリークに自生する。茎の長さは1.5mにも達する。本来この草は多年生であるが、冬場の寒さのため、冬に枯れる。この枯れた根が有明海に流出して有明海で養殖されている海苔に付着すると海苔の製品価値が激減する。このため、佐賀市、佐賀県は毎年水草を除去するために莫大な支出を余儀なくされている。一方でホテイアオイは窒素の吸収が旺盛で、その意味では水質浄化に役立っている。栽培実験によればクリークの窒素濃度を1/5に減らした報告がある。水草の有効活用の検討が必要である。

佐賀のクリーク公園（ひょうたん島：Fig.4）では自主的な住民の管理組織が作られて、自分たちの出来る部分と行政に依頼する部分の作業分担を明確にして取り組んでいる。このような取り組みが定着する管理体制が必要と思われる。

福岡県大木町の木左木小学校では、1年から6年までの総合学習でクリークを取り上げ、環境学習に生かされている。

地域住民がクリークの利活用を通して地域づくりに取り組むとともに、良好な水辺環境や農村文化を保全していくことが望まれる。